

平和主義とは何か 政治哲学で考える戦争と平和

松元雅和著

理想を擁護するために



(中央公論新社・861円)

まつもと・まさかず 1978年生まれ。島根大教育学部准教授。著書に『リベラルな多文化主義』など。

戦争は善悪の問題ではなく国家の合理的な行動であると考える現実主義。戦争における正義を追求し「正しい戦争」のみを容認する正戦論。この二つの立場に違和感を持つのであれば、本書は一読の価値がある。著者の狙いは、現実から乖離した理想主義として揶揄されがちな平和主義を擁護することにあるからだ。

著者が定義する「平和主義」は、あらゆる状況下で非暴力を貫く絶対平和主義だけではない。戦争は原則禁止されるべきだが、やむを得ない場合の暴力行使は許容する平和優先主義も含まれる。むしろ後者に軸足を置きながら、著者は平和主義に対立する議論を題材に哲学的な「対話」を試みている。

「愛する人が襲われたら」。平和主義者に頻繁に向けられるこの問いを、著者は私的感情に訴えて国家的暴力の動員を促す論理であると非難する。さらに、結果が望ましいものであれば戦争は正当化され得るという帰結主義に対しては、行為の正しさを行為それ自体から内在的に判断する義務論の立場から反駁する。

つまり、戦争の正否を論じる前に、戦争がかたちを変えた殺人であることを自覚すべきというわけである。そうした視点から、「非暴力は無責任」であり不正への対処から目をそらしている」と論じる正戦論者、「非暴力は無力」であって「平和を望むなら戦争を準備せよ」と主張する現実主義者、「人権侵害を阻止するための武力行使は正しい」と断じる人道介入主義者などの主張を批判的に検討している。

最終的に著者が提唱するのは、討議、批判、議論を通じた民主主義の国内的促進が国際平和をもたらすという「民主的平和主義」である。歴史的文脈や国際法に関する議論をあえて視野の外に置いた政治哲学的アプローチを採ったことが、「対話」を不完全なものにしていく面があり、やや理想論に傾き過ぎているきらいもある。しかし、平和主義＝絶対的平和主義と捉えられがちな日本の論壇に、本書の問題提起は一石を投ずるものであろう。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)

西日本新聞

2013.6.16.